

---

# 『勇者』に当選しました

テンタロー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『勇者』に当選しました

### 【Nコード】

N1722S

### 【作者名】

テンタロー

### 【あらすじ】

ある日届いた小包。

中から出てきた冊子のタイトルは『勇者』にご当選おめでとうございます  
『

そして目の前に現れた美少女。

突然勇者になった少年が巻き込まれた刺激的な冒険の渦。  
序章では現世と異世界を行き来しパーティを結成します。

## 1話 1つ当選おめでとういいます

? ? ? ?

その小包こじょうが届けられたのは両親が出かけている平日の夕方だった。  
ピンポン。チャイム。

「シロネコです。お届け物です」インターホン。  
トントントン。玄関まで歩く。

ガチャ。ドアを開ける。

「三日月みかづき太陽たいようさんですか?」シロネコ宅急便。

「そうです」俺は答える。

『三日月』と『太陽』・・・同じ空に存在してはいけないような二つの言葉だが、俺の名前にはその二つがきっちり共存して俺という人間を表している。

「こちらにサインか判子を」

印鑑を捺おして小包を受け取る。

「ありがとうございます」

シロネコの配達員が元気よく去って行く。

ガチャ・・・カチャリ。ドアを閉めカギをかけた。

ズシリ。みかけの大きさを裏切りかなり重い。

シロネコ宅急便から届けられた荷物の伝票には俺の名前が書いていた。

「俺宛あて、らしい」

AMAZONから頼んでいたゲームが届いたのかと思ったが違った。

伝票はすべて英語で書かれていた。海外から届いたもの?

「ええと・・・どこからだ？」

送り主は・・・ええと・・・英語だから読めない。

「海外から届いたのか？」

? ? ?

居間のテーブルに置いた小包を開けてみた。

「なんだこれは・・・」

そこにはぎつしりとビニールのみもで束ねられた小冊子が入っていた。おそらく20冊以上はあるだろう。

ドシ。小冊子の束をテーブルに置く音。かなり重量感がある。

パチツ。ひもを切る。

上から一冊ずつ手に取った。

一番上の冊子の表紙には英語でタイトルが書かれていた。

中身を開ければすべて英語で書かれていた。

パラパラと中身をめくるとイラストと英語がプリントされていた。

両親が英語学習のために買ったのか？ と思った。

しかし。

上から2番目の冊子は韓国でおなじみのハングル文字だった。中身もハングルで書かれていた。

これで両親が英語教材を購入した線は消えた。

3番目は(たぶん)アラビア文字。もちろん中身は(たぶん)アラビア文字。

4番目は英語に似ているがアルファベットではない文字。ヨーロッパのどこかだろうか。

何冊か見てきて、冊子の厚さと表紙のレイアウトからして同じ内容の冊子をいろんな国の言葉で書いたものなんだな、と理解した。

となると日本語があるはずだ。

日本語を探してみよう。

5冊目、6冊目、7冊目……と次々箱の中から出していった。ようやく残り2、3冊のところまで日本語に出会った。

日本語会いたかったよ。ようやく会えたね、日本語。

軽い感動を覚えたところで今まで気になっていたタイトルを<sup>おが</sup>挿んだ。

そこには、

『勇者にご当選おめでとございます』

と書かれていた。

勇者にご当選……なんのこっちゃ。サブタイトルには、

『勇者に見事選ばれたあなたは60億人のこの世界の人間からたった一人選ばれた、文字通り選ばれし人間です。一緒に勇者ライフを楽しみましょう。レッツエンジョイ勇者ライフ』

と書かれていた。

勇者ライフ……それは何語だ？ 誰が書いたんだ。センスを疑う。

「勇者ライフ……」

声に出すとさらに浮世離れた。

こんなものを両親が頼んだはずはない。

『懸賞金が当たりました』『ハワイ旅行が当たりました』的な当選メール詐欺や当選ハガキ詐欺なら聞いたことがあるが。これもそのたぐい？

それでも興味本位にページをめくった。  
最初のページには、

『以下に書かれている文章を声に出して読むと良い事が起きるよ？』  
と書かれていた。

良い事ってなんだよ。勇者にでもなつて勇者ライフを送れるのか  
い・・・とばかりしいことを想像してみた。

ふん。ばからしい。

『以下に書かれている文章』を見る。

カタカナの羅列られつが2行書かれていた。

ふむ・・・わけのわからない文章だ。文章というよりも暗号みた  
いだな。俺には解読不可能だ。どこかのメガネ小学生の高校生探偵  
だったら解読可能かもしれないが。

「アイネミキルアペイデ」

冗談半分に羅列を声に出してみた。

次の行に移る。

「キゼノアニスキラスアリス」

読んだ。

さあ何が起ころんだ。

無音。俺の言葉は空気に儂はかなく消え去り辺りは静まり返っていた。  
いつもの夕方のわが家の居間。

おい、読んだってば。良い事が起きるんだろ？

無音。むなしげに時は過ぎる。

どうした、起こすなら起こして見る。

無音。何事もなく時は過ぎる。

はい、何も起きません。送り主にまんまとだまされました。

「まったく、なにも起こらないじゃないか」

これは誰かのいたずらだな。

も、もしかして・・・妄想する・・・俺がへんてこな文章を読んでいるところをビデオで撮影して、大勢でそのビデオ上映会を開いて俺を笑い物にするのだ・・・と想像したがそんな面倒なことをする奴は友達の中に誰もいない。

「これはあれだ、頭のイカれたやつがいたずらだ、きつとそうだ」  
次のページもめくらずに冊子を放った。

あゝあ、時間を無駄にした、親のいないテレビを独占できる時間を。

レンタルしたDVDを俺パソコンの小さなスクリーンで観賞するのではなく居間に置かれた大画面で気兼ねなく見れるチャンスなので、  
気を取り直してアニメを見ることにして青色のケースからDVDを出した。

ポチ、スーツ。オープンボタン、ディスクテーブル開く。

カチツ。DVD挿入。

ポチ、スーツ。クローズボタン、ディスクテーブル閉まる。

ウィーン。ディスクの回転。

ワクワクドキドキ。アニメに向けられた感情。

?  
?  
?  
?

アニメを10分くらい観た時だった。

ゴゴゴゴオ……。

妙な音。

再生機が壊れたか？ 耳を近付ける。違う、再生機の故障ではない。

ゴゴゴツゴツ……再生機とはまったく関係ない音。

地鳴りのような音が居間全体に響いている。

何の音だ？

耳をすませる。

台所から聞こえてきていた。

台所に向かうと冷蔵庫がおかしな音をうなり出し出していた。

この冷蔵庫、とうとう壊れたのか？ 10年以上使っている。

ゴゴオゴゴオ……。

冷蔵庫を開けてみた。中にあるライトが切れそうになる蛍光灯みたいにチカチカしていた。

そして冷風が吹くはずの生ぬるい風が吹いてきた。

さっきの冊子を見てしまったからだろうか、魔界から吹いてくる風のように感じた。

だめだ。冷蔵庫が壊れている。冷凍庫を開けたが冷凍庫の方は機能してるみたいだ。

対処方法は？ 母親が帰ってくるまで待っている？

ゴゴンゴゴンゴ……。

異常な音だ。帰ってくるまでに爆発でもしたらどうしようか。とりあえずコンセント抜いたほうが良いか……。いや冷凍がとけてしまうか？

「どついたら良い？」

なにもない空間に疑問詞がポカんと浮かんで消えた。

誰も良案を教えてくれないのでひとまず冷蔵庫から離れた。

異音の中にさらなる異音が混じり聞こえたのは、椅子に座りながら修理会社に電話して修理しに来てもらおうかと悩んでいた時だった。

ゴゴンゴゴンゴ……。キャッ！

「きゃ？」

俺は思わず口に出した。

冷蔵庫から騒音にまじり女の子の声が聞こえたのだ。

ゴゴンゴゴ……。イタタっ……。ゴゴゴッ。

確かに女の子の声だ。痛がっている？

ゴゴゴッ……。開けてっ！……。ゴンゴゴ……。はやく……。ここから出してっ！……。ゴゴッ……。

『開けて。はやくここから出して』

そのように騒音の間から女の子の助けを求める声が聞こえる。

俺の耳がどうにかしたか？ でも確かにそう聞こえたよな。

『ここから出して』のここからというのは俺の目の前にある冷蔵庫の中？

ゴゴゴ・・・はやく開けてっ・・・ゴゴンゴッ・・・はやくして  
くださいっ、うううう・・・ゴッゴゴ・・・。

冷蔵庫を開ければいいのだろうか。

開けよう。

ガチャ・・・。冷蔵庫の開く音。

は？　なんで、どうして・・・は？

牛乳。豆腐。納豆。漬けもの。キムチ。マヨネーズ。ケチャップ。  
イチゴのジャム。味噌。お好み焼きソース。ポン酢。昨日の晩飯の  
残りもの。ラップされた皿に乗るカットされた果物たち。100%  
果汁ジュース。親父の缶ビール。入れてる意味が分からない単三乾  
電池・・・以上、本来ならば冷蔵庫に入ってものがいつさい跡あと  
形もなく消えていた。

かわりにいたのは・・・。

「ぶっはああーっっ！　はあっ、くるしかったあー！」

女の子だ！　それもかなりの可愛さ。

ずっと水の中にもぐってやってやっと水面に飛び出て空気を思いつ  
きり吸い込むような声。

冷蔵庫の中身のかわりに女の子が現れたのだ。

そして冷蔵庫から飛び出た彼女は俺にいきなり倒れ込んだ。

「きゃっ」

バランスを崩した？　その子は手を広げ俺に抱きつく格好でダイ  
ブ。

ドテッ。

「ててて……んぐぐ」床に腰を打ちつけた痛さで俺の声がくぐもる。

周りが暗い？ いや、俺が無意識に目を閉じているのだ。

俺の体にひと一人が乗っかる重さを感じる。

ゆっくり目を開ける。

そこには見たこともないほど可愛い女の子が俺の身体の上にまたがっていた。

「んあ……」喉の奥からしぼり出すような女の子の声。

混乱。俺の頭は混乱。目が回りそう。

「んんっ……」

ゴシゴシ。女の子は長く暗闇にいてまだ目が光に慣れていないように眩しそうに目をこすっていた。

その姿は純白のワンピース。それに映える長い黒髪。

ワンピースから伸びる細い二の腕、その先の左右の手首に金色の腕輪。

ワンピースの裾から陶器のようなめらかなふともも。折って座るひざが俺の肩に当たっている。

そこには人の重み。そして優しいぬくもりがあった。

これは夢ではない。現実だ。

じ　　っ。彼女の魅力にガン見。

くんくん。鼻をひくつかせる。ほのかにバラに似た心地良い香りが漂う。

俺はぼーぜんと女の子を見つめていた、いや、見とれていた。

ようやく目が慣れてきたのだろう、彼女の目の焦点が俺に定まった。

「ほえ？」彼女は口を開けた。

「あ、あの・・・」俺の頼りなげな声。

混乱。まだ頭が混乱。

そして女の子の口から出た次の言葉にさらに混乱。

「こんにちは、勇者様っ、これからよろしくお願いしますねっ？」

女の子は僕の上にまたがったまま、とびっきりの笑顔でそのようにあいさつした。

勇者様？ 誰のことだ？

もしかして？ もしかして俺の事？ 俺は、俺が勇者である、というありえない予想を立てる。

ありえない予想？

いや待てよ・・・いきなり冷蔵庫から現れた現実離れの可愛いさの女の子が俺の上にまたがって俺に向かって『勇者様？』と笑顔で話しかけるこの状況こそがありえねんじゃね？

そこで確かめてみる。

「勇者って俺の事？」

「はいもちろんそうですよっ、勇者さまっ？」

ああ、やっぱり俺が勇者なんだ・・・って、勇者に当選したってのはマジだったのかよ！

それよか・・・俺の上に乗っかるきみは何者？

女の子の名前を訊く前より先に俺は言わなければならない事があった。

少し冷静になった頭が下腹部の重みを警告する。女の子の全体重をみぞおちが引き受けている。

「あの・・・」

「なんですか、勇者様」

「どいてくれないかな。すごく、苦しい・・・」

こうして俺は知らんうちに勇者に当選した・・・でも勇者って何すんの？

次話に続く。

1話 1つ当選おめでとうございます(後書き)

お読みいただきありがとうございます。

楽しんでいただければうれしいです。

評価・感想も待っています。

## 2話 自己紹介、そして異世界へ

? ? ? ?

俺にのっけていた体を起こし目の前に立った女の子。

「よかった、言葉が通じて。わたし、英語とポルトガル語とスペイン語と中国語と、それからスワヒリ語とマオリ語とお・・・えっと全部で150ヶ国語以上しゃべれるんですけど日本語が通じて良かったあ〜」

それだけ話せればどこ行っても通じるよ。

俺も立ち上がる。

心を奪われたのは目を合わせたと同時にだった。

合えば思わずずらしてしまう視線。

尋常じゃないほどの可愛さ。可愛さがほとばしるっ。

学校の女の子。街で見かけた女の子。テレビで見た女の子。

俺は彼女たちにどれだけ心を奪われるほどの可愛さを感じてきたことか。

しかし目の前の女の子の可愛さは俺が経験したことのないほど強烈な可愛さだった。

恥ずかしくて1秒も続けて目を合わせられない。

目が合うたびに心臓がビクンッ。

これは現実? 非現実?

ほおをつねる・・・痛い・・・ベタな方法で現実であることを証明。

じ・・・俺の視線・・・女の子に張り付く。

成分の95%は可愛さ。

あと5%は？  
これから見つける。

じ　・・・女の子の細部に視線をズームインそしてパーン。  
どこか幼さが残る顔はハーフみたいな顔立ち。  
透明感のある、ツルンとした白い肌。

なめらかに光を反射する黒髪は腰まで。  
白いワンピースはセクシーに肩まる出し。丈はひざよりちょっとだけ上。そして革製の白ブーツ。

胸には十字架の金のペンダント。両手首には金の腕輪。左手の小指に金の指輪。女の子の身につける装飾品はすべて金色。

今度は細部の情報から全体にズームアウト。神聖な雰囲気あるいはオーラを放つ。

にここに。女の子は俺を見てずっと笑顔。  
目が合うと首をかしげとびっきりの笑顔で見つめ返してくる。  
女の子は俺が話しかけるのを待っているよう。  
我に返ろう。

このまま笑顔で見つめられ続けるのは嬉しいけど、この非現実的な現実の状況把握。

おそろおそろ質問。

「き・・・つくつ」

声がのどの奥に引っ掛かる。

あれ、声ってどうやって出すんだっけ？  
声の出し方を忘れる。

深呼吸。

持ち直して再質問。

「き、きみ、どこから来たの？　どうしてここにいるの？」

女の子が不思議な表情。

「どうしてってわたしは勇者様が呼んだから来たんですよ？」

呼んだ？ 俺呼んだ？ いや呼んでない。知り合いじゃない。

「俺は君なんか呼んでないんですけど・・・何もしてないし・・・」  
いや、何もしてないというのは嘘になる。変なカタカナ文章を声に出して読んだ。

「何もしてないことないですよ。わたしは勇者さまに召喚されないとこの世界に来れないんですから」

召喚？ 俺はいつから召喚魔法を使えるようになったんだよ。

「確かにへんな文章読んだことには読んだけど・・・」

「ほらっ、やっぱりわたしを呼んだんじゃないですか。その文章が召喚呪文ですよっ」

あんなに簡単に呪文って唱えられるの！？

はっとエーファが何か思い出したように。

「そうだっ、最初は自己紹介ですねっ」

姿勢を整える。胸を張る。

「わたしはエーファ。エーファ・エリルですっ。よろしくお願いますっ」

エーファはぺこりと頭を下げた。バサッ。長い黒髪が前におりる。

エーファ・・・外国人？ なのか？

「俺は三日月太陽、15歳です」

なぜかパツと明るくなるエーファの表情。

「月と太陽っ！」

ピョンッ。エーファは床から10センチ飛び跳ねた。

「わたしの世界にぴったりの名前ですっ」

パチッ。手を合わせて喜んだ。

エーファの世界にぴったたり？

理由はともかく自分の名前で喜ばれるのは初めての経験。少し嬉しい。

エーファが視線を床に向けて驚いたように何かを発見。

「あ、こんなところに、勇者様つだらしないですよ」

視線の先。俺が放りなげた小冊子。

「もう、勇者様つたら、大事なものなんですから粗末に扱っちゃだめですよ」

拾い上げて大事そうに抱きしめるエーファ。

「大切にしてくださいっ」

ほっぺたをふくらませて怒っている。

小冊子が大事なものという考え・・・俺には皆無。

「これはわたしの世界の案内パンフレットみたいなものなんです。

文字も大きいしイラストも付いているし見やすかったですよ？」

「それ、中は見てないですよ」

「えっ！？ちゃんと見ないとだめですよ。中身を見ないでわたしを呼んだんですか？ 今からでも読んでください」

パラパラ、めくる。

恐竜みたいな巨大な生物がジャングルを歩いている・・・合成  
にしか見えない写真。

よぼよぼの老人が杖一本でその恐竜と戦っている・・・非現実  
的なイラスト。

巨大なカメ（カメラみたい）に向かって軍隊が砲撃している・・・

・映画見たいなイラスト。

『こうして世界は勇者によって救われました』・・・とても世界  
を説明するに不誠実な文章。

小冊子・・・フィクションと判断。

この女の子はフィクションじゃないけど、もしかしてこの子はフ

イクシヨンの世界に生きているのか？

現実と非現実を混同？

あるいは俺は騙されているのか？

人の家に勝手に上がり込んで冷蔵庫の中に入って助けられる自作自演・・・という想像、フィクシヨンのでありえない。

本当に異世界から来たの？

混乱。

とりあえず聞く。

「3頁に書いてあるやつですけど、ジュラジックパークに出るような大量のザウルスのなやつに人間がたくさん襲われてるイラストって・・・実際にあったことじゃないですよね？」

聞いて恥ずかしい。絶対あるはずない非現実的なことを「現実ですか？」とあえて聞くこつ恥ずかしさ。

しかしエーファからありえない回答。

「もちろん実際にありましたよ。わたし、まだ小さくて覚えてないけどサイコンの群れが当時村人たちをたびたび襲っていたんです。それと、そこに載ってるものはみんな実際にあったことですよ」

サイコンとはザウルスの巨大生物の名前らしい。  
真顔で答えるエーファ。襲われた村人たちを心から気の毒に思う表情。

混乱。

俺の世界では非現実。

エーファの世界では現実。

混乱。

とりあえず話を進める。

「そんなサイコンみたいな生き物がある世界なんて絶対行きたくない

いんですけど……」

「大丈夫ですよ。勇者さまは強いんですから、サイコン何かペチンです」

ペチンッ。手のひらに握りこぶしを当てる。

蚊やハエをたたくような感じでやってみせた。

イラストのサイコンを観察・・・サイコンをペチン・・・いや、無理だろう……。

パラパラ、小冊子をめくる。

白い塔が地上からまっすぐ雲に突き刺さってる写真。

「この高い塔は？」

「賢者の塔です」

やはり実在するようだ。

「そこはわたしの世界に行ったら勇者さまが初めに訪れる場所です。これからさっそく行きますよっ？」

賢者の塔に行く？ 異世界に行く？

いつの間にかエーファの世界に行くことになっている。

だんだん不安。もし本当に異世界があつてこの子がその世界からやってきたとしたら、どうしよう。こんな世界に行きたくないぞ。

「俺に拒否権はないんすか？」

「ありませんっ」

即答。拒否権無いのかよ。

「で、でもまだひと言もきみの世界に行くなんて言ってないし」

あんなでかい恐竜のいる所なんか行きたくない。

「契約なんですからそんな事言わないでください」

契約？

「ほら、ここに注意書きが」

エーファが指差す。そこだけ黒く塗りつぶされていただけかと思っていたが小冊子の表紙の右隅にかなり小さな字で文章。

目を細めて読む。

『このたびキャンペーン期間中に勇者にご加入いただいた方は基本料金無料。ただし一定期間、勇者の契約解除はできません。』  
たしかに勇者の契約解除はできないと書いてある。

それよりキャンペーン期間でなんだよ、基本料金無料でなんだよ、キャンペーン中じゃなきゃ勇者になるのに金とられてたのかよ。

さらに読むと『キャンペーン中に勇者プランにご加入いただければ、基本料金2880円で勇者プランからゴールド勇者プランへ変更の特典。ただしゴールド勇者プランへの加入は新ボーナス勇者プランの加入が前提』

？勇者プラン？他にもあんのかよ、基本料金2880円でさらに強そうな？ゴールド勇者プラン？に変更で案外安くね？ あ、でも？新ボーナス勇者プラン？に加入してなきゃだめなのか、結局高くてしてしまうのか・・・ってどこのソムトバンクのCMだよ！

そんな具合でまだまだ契約条件が書きつらねていた。

怒りをこめて不親切な注意書きに抗議する。

「こんな小さな、しかも隅っこにひっそりと、こんな文字見えるわけない！」

「そんなこと言っても遅いです。もう勇者様は勇者様になったんです」

もう訳が分からない。

状況がつかめない。

イライラ。

「さつきから聞いてると、勇者、勇者って、俺、勇者になるつもりもないし、勇者になった実感だってないし。君がいくら説明してくれてもこんな冊子に書いてるものが現実にあるなんて信じられない。それから君の名前を聞いただけで君が誰かも知らないし。」

とにかく信じられない者は信じられない。証拠があるんなら見せてくれよっ」

キレ気味に言ってしまった。

エーファはそれでも笑顔で見つめてきた。

「そうですか。勇者様はまだ自分が勇者だと信じてないようなので実際にわたしの世界に行ってみましょう」

「え、ちよっ」

エーファに背中を押される。

「こつちこつち」

冷蔵庫の前。

二人で並ぶ。

エーファがお祈りのように目をつむり指を組み合わせる。

神聖さ発生。

そして何かぶつぶつと唱えはじめる。

「アミネ\*@\$ルイデ?#¥%キノア ?ラスアリス.....」

早口。聞き取りにくい。俺が読んだ妙なカタカナ文章みたいだ。

静電気で逆立つようにエーファの黒髪が乱れる。

1分くらい唱え続けた。

「.....キナ\*¥×ビジエ@\$\*#ファルアリス」

そして突然終了。

しばし無言。

神聖さがしだいに収束。

エーファが指をほどき目を開け俺を見つめる。

笑顔に戻る。

「さ、これで扉は開かれました。行きましょっ、勇者さまっ?」

ガタン。エーファが冷蔵庫を開ける音。

あるべき食品の代わりに淡い青色を放つ波面。

ゆらゆら。波面が波打つ。波打つたびに青色の濃淡が変化。

「とても信じられないけど・・・本当に違う世界に行くの？」

「もちろん、でないとも始まりませんから。さ、勇者様っ、百聞は一見にしかずと言うやつですよっ？」

手をひかれた。小さくてやわらかい手。

「賢者の塔に行きましょっ？」

ふわりと浮力。エレベーター加速時の感覚。下半身がゾクッ。

床から離れる踵かかとそしてつま先。

水に浮くように空気に浮く。

そして体が波面めがけて移動。

エーファは俺と体を向き合わせた。

右手と右手、左手と左手を握り合う。

「わたしの手を離しちゃだめですよっ」

わかった、離さない。

エーファが指をからませてくる。

もうどうにでもなれ、異世界に行くなら行ってやる！

そして体が波面に触れた時、掃除機に吸いこまれるように、急加速を感じる体が波面の中に飲み込まれた。

そうして俺は異世界へと旅立った。

## 2話 自己紹介、そして異世界へ（後書き）

お読みいただきありがとうございます  
楽しんでもらったら歓喜

次話キーワード・・・『賢者の塔』と『勇者の腕輪』  
次話もお楽しみに

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1722s/>

---

『勇者』に当選しました

2011年4月10日17時55分発行